魔法少女リリカルなのはStrikerS ～Ｚの軌跡～

長いヴァーチェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

【Ｎコード】
Ｎ３６１２Ｚ

【作者名】
長いヴァーチェ

【あらすじ】
アルバートが倒されたことにより崩壊するウロボロス。ライブメタル・モデルＺは一人残り、仲間のモデルＨ達を助けようとするが、モデルＶによって異空間に飛ばされてしまう。
一方、ミッドチルダでは、時空管理局“特務零課”とよばれる特殊部隊の隊員、マイティが裏で暗躍していた。

第０話「共鳴」（前書き）

こんにちは。長いヴァーチェです。
ロックマンＺＸＡの続編が出る気配がないので勢いでこの小説を書いてみました。ちなみに初投稿です。

この小説は前半はモデルＺとオリジナルのキャラが主人公です。リリカルなのは本編のキャラは後半から出す予定です。

はじめての小説なので、文章がおかしかったり、表現が変だったり、誤字脱字が多かったりと、いろいろ問題があるかもしれませんが、どうぞよろしくお願いします。

長々とすみません。

では

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～Ｚの軌跡～

始まります。

第０話「共鳴」

『…エール、グレイのことはまかせだぞ…！』

自ら神を名乗り、世界を支配しようとした男、マスター・アルバートは運命を変えようとした少年に破れた。それは、彼が始めた数百年に及ぶ、運命のゲームが終わった瞬間だった。

灼熱の爆風が駆け巡り、新たな世界の礎となるはずだった神の城・ウロボロスは今、崩れ去ろうとしていた。その崩れゆく城の中に人影が４つ倒れている。

「リカイフノウ、リカイフノウ」

「恥ずべき誤算。このままでは…」

「一体どうなってるんだ…。確かに意識を封じ込めたはずなのだが。」

「体が重い。このまま終わるなんて…。」

英雄の力を継ぎ、世界の王となりうる資格者、ロックマン。彼ら４人は今、紅き英雄の魂が込められた金属、ライブメタル　モデルＺに動きを封じられていた。

『言ったはずだ。モデルＨ達のことは俺の方がよく知っていると…。』

モデルＺは倒れている４人の側で浮遊していた。倒れている４人が持つライブメタル　モデルＨ　Ｐ　Ｆ　Ｌはもともとはモデル Ｚの

仲間であったが、研究所から強奪された際、意識を封じられ、敵の手に渡ってしまった。　取り戻す方法はモデルH達に掛かっているプロテクトを外し、意識を回復させるしか方法はない。

モデルZは動きを封じ込めている間、モデルH達に掛けられたプロテクトを次々と外していった。プロテクトは厳重に掛けられていたが、モデルZにとってそれらを外していくのはあまり苦労しなかった。

『これで最後だ！！』

ついに最後のプロテクトにたどり着いた。モデルZは意識を集中して最後のプロテクトの解除に取り掛かる。これさえ外せば、モデルH達は意識を取り戻す。これさえ外せば終わる、はずだった…。

『何？プロテクトが…。』

突然、モデルZはプロテクトが外せなくなった。いや、外していたプロテクトが消えたのだ。忽然と…。

『…一歩、遅かったか。』

もうそこには4人の姿はなかった。あと、一歩というところで彼らは何者かに転送されたのだ。

アルバートが死んだ今、彼らを助けられる奴はいないはずだ。一体、誰が…。

少なくともこれでモデルH達の奪還が失敗に終わったのは確かだった。

『……。』

周りでは、至るところから炎が噴き上げていた。城から無限に生み出され、幾度と自分たちの邪魔をしてきた機械生命体、イレギュラー達も崩れ落ちてくる瓦礫に潰されてゆく。つい先程、死ぬつもりはないとエールに言ったが、この状況での脱出はかなり厳しい。モデルHたちがいれば、状況はかなり好転するはずだった。その上で、死ぬつもりはないとエールに言ったのだが、まさか転送されてしまうとは夢にも思わなかった。

モデルZは久しぶりに自分の死を覚悟した。記憶は消されていても、このジリジリと迫ってくる死の予感は初めてではない。そんな感じがするのだ。しかし単機での脱出できる可能性は無いわけではなかった。限りなくゼロに等しいのだが…

『可能性があるならば、そこに賭けるしかない！！』

そう、諦めたらそれで終わり。最後まで自分を信じてはじめて可能性が拡げられる。

そしてモデルZが行動を起こそうとした、その時だった。

――――――グオン――

爆発音に混じって、かすかに聞こえる音…。初めは空耳だと思い、音の正体を深く考えようとはしなかった。今のモデルZにはそんなことを気にしてる余裕がなかった。

――グオン――グオン――

地の底から響くような、重々しい音が次第に大きくなっていく。と同時に、周りが、まるで音にあわせるように、赤く光りだした。

『モデルVが共鳴している、だと？』

ライブメタル・モデルV。それは数百年前に偶発的にできたライブメタル。すべてのライブメタルの元祖とも言える。
ライブメタル・モデルVは他のライブメタルとは違って個体数が非常に多い。そのすべてが融合したものが、今いるウロボロスである。そのため、ウロボロスの内部はモデルVの特徴でもある、赤いクリスタルが至るところに露出しており、臓器のように蠢いている。しかし、アルバートが倒されたことで活動停止し、朽ちていくだけだと思われていた。

『何故、今になって活発になる？アルバートは死んだ。もう、誰もお前達を必要としていない。ここで消え去れ！！』

モデルVは嘲笑うかのように共鳴している。

突然、モデルZの足元（といっても、ライブメタルであるモデルZに足はないのだが）が消えた。

『なっ！？』

足元には、先程までなかった、巨大な赤黒い空間がポッカリと口を開けていた。床に落ちていた、壁の欠片が音もなく吸い込まれていく。

『あの中に落ちたら…』

俺はもう二度と、この世界に戻って来れない。

モデルＶの共鳴が続くにしたがって、空間の穴はどんどん大きくなっていく。

『モデルＶの仕業か…。』

そう、この現象は全てモデルＶが引き起こしていた。ウロボロスを構成する、全てのモデルＶがアルバートに力を与えていたと当初は思われていた。だが、いくらアルバートとはいえ、一人でこれだけのモデルＶを扱いきれるわけがない。

結果、アルバートが使用していた分のモデルＶは全体の４分の３である（これだけ制御できたということ自体、十分すごい。普通はその１％の欠片でも制御するのが困難だからである。神を自称するだけの力と精神力はあったわけだ。）

一方、使用されなかった４分の１はイレギュラーを無限に生み出し、巨大なウロボロスを海上に安定して浮遊させるための動力源として機能していた。

そして、アルバートが死んだ今、その４分の１は今まで行ってきた機能を全て放棄し、別の行動に移ろうとしていた。

ライブメタルとは意思を持つ金属。この状況下で彼ら（？）が起こす行動はただひとつ。

すなわち……『脱出』。

モデルＶ達は異空間に逃れようとしていたのだ。

今や、赤黒い空間はモデルＺの周りを覆いつくしていた。
モデルＶでできた床、天井、壁が空間に次々と飲み込まれてゆく。
圧倒的なまでの力の流れ。
爆発の光さえも飲み込まれていった。

『ここまでか…。』

どうあがいても絶望、とはこういうことか。
圧倒的な力の流れに逆らうだけの力をモデルＺは持ち合わせていなかった。

だから、なすすべもなく……飲み込まれた。

第０話「共鳴」（後書き）

第０話完。
オリキャラのマイティは次回から登場です。

あと、モデルＶの異空間を開く能力、という設定は

「モデルＨのところで、比較的ちっこい（人間と比べたら当然でかい）モデルＶが一個で重力を狂わせたから、たくさんいれば空間を狂わせて、異空間に飛ぶ（？）ことも出来るのでは！？」

とこのような妄想（想像）から作りました。

次回もどうぞよろしく。

第1話「汚れ役」（前書き）

いよいよオリキャラ「マイティ」が登場します。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

始まります。

第1話「汚れ役」

「き、貴様！こんなことをしてただで済むと思っているのか！！」

薄暗いホテルの部屋の中で老紳士が叫ぶ。老紳士は恐怖と戦いながら目の前の男を睨み付けた。

男の右手には銃が握られており、足元には自分の秘書が倒れていた。美人と評判だったその女性の顔は恐怖でひきつったままだ。ちなみにもう死んでいる。

「私は時空管理局の中でも絶大な権力を誇る、提督なのだぞ！！貴様ごとき、私の声ひとつで終身刑にする事もできるわ！！」

「……。」

老紳士の息は荒く、声は恐怖で震えている。

対する男は静かに老紳士を見据えていた。その眼光はまるで獲物に襲い掛かろうとしている鷹のようだ。

老紳士は一言も話さない男の不気味さに気圧されていた。

自分は提督。時空管理局の中でもかなりの地位で、そして市民や部下からの信頼も厚い。魔導師でないため、地位に就くまではかなり苦労した。が、それに値する絶大な権力と富を手にいれることができた。そこらの若造共とは、わけがちがう。この私に出来ないことはないはずだ！

しかし老紳士は目の前の男を権力でねじ伏せられなかった。老紳士に不安の波が押し寄せる。

「貴様の目的は何だ？」
老紳士が恐る恐る尋ねる。すると、今まで黙っていた男の口が開いた。
「お前の命だ。」
「！？」
「お前は市民や局員から尊敬を集める一方、…」
一呼吸置く。
「特務零課を使い、各地の聖王教会の関係者を次々と消してきただろ？」
老紳士は“特務零課”という言葉に反応する。
「な、何故お前ごときが、特務零課の存在を知っている？」
「何故かだと？それはな……俺も特務零課の隊員だからだ。」
その言葉を聞いた途端、老紳士の顔は恐怖で歪む。
殺される！！
まさか、聖王教会の連中が奴らを買収したのか？いや、そんなわけはない。特務零課は仮にも時空管理局の一部隊。部外者に手を貸す程、お人好しのはずが……いやいや、奴らはイレギュラ

ーな存在だ。金のために裏切ったっておかしくはない、血に飢えた殺人集団だ。ん…？

待てよ…。

何故、特務零課を使って聖王教会の神父どもを殺害したのがこの「私」だと、向こうは知っているのか？神父どもは聖王教会にとって、さほど価値はないはずなのに…。

足元に力が入らなくなり、老紳士はそのまま座り込んでしまった。

「た、頼む。助けてくれ！！命だけでも…。お願いだ…。」

老紳士は泣きながら、地面に手をつけ、土下座をする。自分の命のために、「提督」というプライドを棄てたのだ。

「……はぁ。」

男は溜め息をつく。

「おそらく聖王教会の連中も殺される前にそうやって命乞いしたのだろう。直接、手を下したわけではないので詳しくは知らないが…。」

老紳士は額を地面に付けながら男の言葉を黙って聞いている。

「俺の知る限り、命乞いをして助かった奴は一人もいない。」

その言葉は老紳士にとって死刑宣告だった。

「最後にひとつ教えてやる。」

男は銃口を無理矢理、老紳士の口の中に押し込む。老紳士は抵抗しようとしたが、恐怖で身体が思うように動かせなかった。

「お前を殺すよう指示をだしたのは聖王教会ではない。」

老紳士の目が驚愕のあまり大きく開く。

聖王教会ではない？なら一体、誰が？

「……時空管理局。」

「！？」

「お前の地位を狙っている奴からの指示、いや依頼だ。」

そんな…、そんなことが……。

「ただ、そいつが狙っているのは時空管理局の地位じゃない。お前が所属する“教団”の地位だ。」

なっ……。

「風の噂じゃ、向こうでも結構良い立場だそうだな。聖王教会の連中を殺すことで、奴らの信頼を手にいれたのか？」

「……。」

「ん？……何だ、もう死んだのか。」
男は老紳士の口から銃口を引き抜く。すると老紳士の遺体がそのまま床に倒れた。
「任務完了。」
男はそう呟くと、ホテルの部屋を出た。

ホテルを出た直後、男の通信端末に通信が入る。
『私だ。』
通信の主は今回の依頼人だった。この局員には今までにも何度か依頼を受けたことがある。ほとんどが殺しの依頼なのだが。ちなみに、お互い保身のため、機械で声を変えて通信することになっている。そのため雑音が少し入るが、あまり問題にはならない。
「任務完了だ。もっとも、目当ての奴は俺が手を下す前にショック死したがな。あと、死体の後始末だが…」
『ああ、それはこちらに任してくれ。捜査員の中には私の部下が数人配属されている。死因の偽装、証拠の捏造や隠滅はお手の物だ。』
「放送メディアに対しては？」
『そこもすでに手を回した。ほんのちょっと圧力をかけただけで簡

単にこっちの言いなりさ。あそこの局長の慌てぶりは結構見ものだったぞ。』

下衆だな。

『ん？。何か言ったか？。雑音で聞き取れなかったのだが。』

「……。わかっているとは思うが、あまり下手な真似はするなよ。」

『わかってるわかってる。あんたらの報復は恐ろしいからな。だが、そちらも“教団”のことであまり変なことをしないでくれたまえ。』

「安心しろ、と言いたいところだが、“教団”を快く思わない奴から依頼を受けた場合はそういうわけにはいかない。依頼通りに任務を実行する。」

『……はぁ。こちらが使う時は頼れる便利な道具なのだが、敵にまわると、この上なく面倒だな。』

「……。」

『まあいい。そのほうがこちらとしても付き合いやすい。これからもよろしくな、マイティ。』

良い夢を、の言葉を最後に通信が切れた。

「ふん、何が“良い夢を”だ。」

人を殺した夜にそんなもの見れるわけがないだろ。自分で邪魔者も

消せない管理職風情が。

マイティはビル街を歩きながら心の中で依頼人を罵った。
もう夜遅いため、ビル街の明かりはほとんど消えており、歩いている人も数えるくらいしかいなかった。

今頃、街の子供たちはベッドで夢を見ているのだろう。

ふと顔を上げると、夜空に満天の星が輝いていた。

「星か…。」

思えば、あの頃が一番平和だったな。

マイティは悲しそうに星を見つめた。

第1話「汚れ役」（後書き）

今更ですが、小説書くのって難しいですね。描写とか特に。戦闘シーンに入ったら、どうしよう…。
あと、マイティは一応、主人公です。

次回、モデルZとマイティが出会います。

次回もよろしく。

第2話「出会い」（前書き）

相変わらずの駄文ですが…。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

始まります。

第2話「出会い」

俺にも一応、子供らしい夢を持っていた時期はあった。
遠い昔、俺の両親は二人とも時空管理局の職員でいつも忙しそうだった。だが、それでも子供だった俺をちゃんと育ててくれた。

「マイティの夢って何なの？。」

母が幼いころの俺に尋ねる。

「夢？。夢って、寝てる間に見る夢？。」

それを聞いた父が笑い出す。

「夢っていうのはな、マイティ。自分がやりたいことのことだ。人生の目標とでも言うのかな。」

「やりたいこと…。」

幼い思考がようやく行き着いた先は純粋な夢だった。

「お星さまをもっと近くで見たい！！」

それを聞いた両親は笑っていた。

「パパやママの夢は？」

不意に俺が尋ねた。

「パパやママの夢はね、お前だよ、マイティ。」

「え？。僕がパパやママの夢？」

「そうよ、マイティ。あなたが私達の夢よ。」

自分が両親の夢。
この頃は俺が自分の夢を叶えることが両親にとっての夢だと素直に思った。

そう、俺は幸せだった。醜い現実に気付かず、ただ作り物の家庭で都合のいいように飼われていた。

『特務零課の方ですか？。』

手持ちの通信端末に機械の音声が流れる。口調からして女性だと思われるが、あいにく声を変えているため歳がわからない。

「そうだ。お前は？。」

『私は聖王教会の者です。』

今度は聖王教会か…。昨日、それと敵対している“教団”の局員を消したばっかりなのにな。まあ、あれは俺が直接、手を下したわけじゃないが…。

「聖王教会のお方が特務零課に一体、何の用だ?。言っとくが、夜のお誘いならお断りだ。」

『なっ!?。そ、そんなんじゃありません!。変なことを言わないでください!。』

かなりあわてている。それに、この返し方…。こいつは相当若いな。肉体的にも、精神的にも。

「それはすまなかった。では、そちらの用件を聞こうか。」

『は、はい。』

女の用件はこうだ。
先日、ここから遠く離れたゴーストタウンにて、聖王教会の布教活動をしていた信者達が何者かに襲撃され、音信不通になってしまった。
今回の依頼はその信者達の保護と、襲撃犯の逮捕もしくは殺害。

「つまり俺は駒か?。」

『え?』

「お前達聖王教会には騎士がいるだろ?なぜそいつらを使わないで、特務零課という不透明な部隊を使う?。」

『そ、それは……。』

「身内を傷つけてしまうくらいなら、金で動く便利な道具を投入しようという考えか？」

『道具だなんて…。』

「思っているだろ？」

『……。』

「……。」

沈黙が二人の会話を支配する。
しばらくしてマイティが沈黙を破った。

「別に気にすることはない。俺達、特務零課は元々そのために作られた。いわば“使い捨ての道具”だ。」

『そうですか…。』

相手の声が悲しく響いた。
ふと、マイティの頭の中に疑問が浮かんだ。

「ところで、お前達の所の信者はなぜゴーストタウンに行ったんだ？」

問題はそこである。いくら布教活動といっても、人のいないゴーストタウンに行くことは、ハッキリ言って意味がない。聖堂で聖歌で

も歌ってる方がまだマシだ。
相手は少し返事に戸惑っていたが、話し出した。
『……これから話すことは他言無用でお願い出来ますか？』
「ああ。約束する。」
『そうですねぇ…。あなたは“教団”をご存知？』
「ああ、お前達と対立している宗教団体だろ。対立しているといっても、規模がお前達、聖王教会よりも全然小さい。まあ、それでも少しずつ勢力を拡大しているみたいだな。」
『ええ。先程、布教活動と言いましたが…実は偵察をさせていたのです。』
「偵察…というと、そのゴーストタウンは“教団”の集会所か何かなのか？」
『はい。普段は誰も居ませんが、月に二、三度、そこで講演会があります。』
「で、お前の所の信者……調査員はその講演会の日に蒸発したわけか。」
『いえ、本来なら無人と思われる日に、急に連絡が途絶えました。途絶える直前に聞こえたのは…』
何かが砕ける音、と調査員の断末魔の叫び。

「潜入した調査員の人数は？」

『二人です。』

「となると、もう一人も生きてはいないだろう。」

『でも、死んでいると言い切ることはできません。』

「なるほど。それで俺に“保護”しろと？。」

確かに、襲撃者に捕らわれている、という可能性も無くはない。しかし…

「襲撃者も未だに現場に残っているとは思えんがな。俺なら、殺したあとすぐにその場を離れる。」

『それでも、一応現場へ行ってください。何か痕跡が残っているかもしれないので…。』

「……わかった。その依頼、引き受けよう。」

一体、何が起きたかわからなかった。正直、今自分が生きているのか、死んだのかもわからない。目の前には土砂崩れか何かで崩れかけたビルが立ちそびえている。

『ここは…一体……』

どこなんだ？

もし死後の世界があるとしても、これはお粗末すぎる。周りには朽ちかけた建物が点々としており、人一人っ子いない。とても極楽浄土とは言えない。いや、地獄だったとしてもいくらか味気無い。

といろいろ考察していると、後ろから物音がガサッと聞こえた。

『誰だ！？』

振り向くとそこには小さな猫がいた。

『捨て子か…。』

猫の毛皮は美しいブロンドで、首のネームプレートには「アイリス」と彫られていた。

『アイリス…。』

初めて聞く名前のはずなのにとても懐かしく感じる。

猫は彼…モデルZが気に入ったのかじゃれついてくる。それは不思議と不快に感じなかった。

さて、これからどうしたものか…。見たところ、もと居た世界ではない。この廃墟を見る限り、少なくとも建造物を建てられるだけの知性があることはわかる。また、アイリスのネームプレートの真新しさから、文明が滅んでいないこともわかる。

まずは人に会うことだ。

モデルZは移動しようとする。すると、アイリスがこちらを見つめながら、ニャアと鳴いた。寂しいのだろうか。モデルZにはその目がなんだか悲しそうに見えた。

『俺は所詮、戦うことしか出来ないライブメタルだ。悪いが、お前には何もしてやれない。』

この声がアイリスに届いているかどうかはわからない。本来、ライブメタルの声は適合者にしか聞こえないからだ。

モデルZは心を鬼にし、その場を立ち去る。

しばらくしてから後ろを見ると、そこにはアイリスがいた。モデルZの後をついてきたのだ。

『やれやれ…。困ったものだな。』

この俺が手も足も出ないとは…。（ライブメタルだから手も足も元々ないが…）

一体、どうすればこの状況を切り抜けられる？

モデルZは悩む。

モデルVや他のロックマンとの度重なる連戦や異世界に飛ばされた反動のため、この時のモデルZの神経は著しく鈍っていた。

「……見つかったのは猫一匹と怪しげなデバイスだけか…。」

『！？』

突然の声にモデルＺは驚く。まさか、ここまでの接近を許すとは。

モデルＺの目の前に、黒いコートを羽織った男が立っていた。男の目付きは鋭く、右手には黒い猟銃が握られている。銃の薬室がある と思われるところには、丸い黄色のクリスタルが付いていた。

『お前は…』

男の顔は遠い昔に戦った敵の顔とよく似ていた。

『クラフト？』

モデルＺとマイティが初めて会った瞬間だった。

第2話「出会い」（後書き）

今回はオリジナルの設定を紹介しようと思います。

『ディファイアント（待機モード）』

マイティの所持するデバイス。分類上ストレージデバイスだが、特務零課で造られた試作型のデバイス。

外見はショートバレルのショットガン。銃身は約４０センチ。色は黒く、薬室（火薬の装薬を入れる部分）と思われる所には、黄色の丸いクリスタルが付いている。
銃身はかなり堅く、打突武器としても使える（本来の運用方法ではないが）。

ちなみにこれが「待機モード（またはガンモード）」
普段はコートの中にしまっている。

実験的に以下の機能が搭載。

・　魔力弾の他に、実弾も撃てる。（質量兵器として使用可。）

・　他人のデバイスの人格ＡＩの“声”を盗聴可。

いつ書き終わるかわかりませんが…、次回もよろしくお願いします。

第3話「白い影」（前書き）

昨日、生まれてはじめてチョコボールの銀のエンゼルが当たりました。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

始まります。

第3話「白い影」

「ここで殺されたわけか…。」

目の前には血で汚れた壁。壁一面に血が飛び散っていた。時間が経っているため、乾いて黒ずんでいる。それでも仄かに鉄のような香りがした。

この血の持ち主は今のところ見当たらない。証拠隠滅のため、どこかに隠したのだろうか？

しかし証拠隠滅だとするなら一つおかしな所がある。この血濡られた壁だ。

なぜこれがそのままの状態で残っているのか？

まるで見せつけているようだ。

見せつけている？

というと…、

「警告……ということか。」

通信記録に残っている、調査員の断末魔の声。おそらく、二人の調査員は“教団”にとって重要な“何か”を掴んだのだろう。そして、その事が向こうに知られた結果、“口封じ”のため殺された。

確かに一理ある。がそれを裏付ける証拠がなければ、所詮ただの推

測だ。

これ以上壁を睨みつけるのも時間の無駄と思い、マイティはコートから黒い猟銃を取り出す。

この黒い猟銃は彼のデバイスで、名はディファイアント。非人格ＡＩ搭載の、ストレージデバイス……ということになっている。というのも、特殊部隊用に実験的に搭載された機能がいろいろと法律に引っ掛かるため、一般的によく使われるストレージデバイスの名でごまかしているのだ。

そして今、マイティが使おうとしている機能も法律に引っ掛かるものだった。

「…ボイスサーチ。」

ディファイアントのクリスタル部が光りだす。

この機能の特徴は、他人のデバイスの人格ＡＩの声を盗聴することだ。

人格ＡＩを搭載しているデバイスの持ち主は、デバイスと意思疏通している。

この機能を使えば、相手が何を考えているのか、次に何をしようとしているのか、などを先読みすることだって可能だ。

もっとも、相手のデバイスに人格ＡＩが搭載されている場合だけ機能するのであって、そうでない場合はただの役立たずだ……。

まあ、起動させておくことに越したことはないだろう。

一時間が経過した。

マイティはあれから現場周辺を歩きまわっていた。

「特に怪しいものも無いな。」

おそらく、二人の調査員の身柄は、向こうの手にあるのだろう。ボイスサーチにも何の反応も無い。

これ以上は時間の無駄か…。

マイティが調査の結果を依頼人に連絡しようとしたその時だった。

『……しか出来ないライブメタルだ。悪いが、お前には何もしてやれない。』

かかった！

ボイスサーチがデバイスの声をキャッチしたのだ。

マイティは手に持っている通信端末をコートにしまう。

敵は人格ＡＩ搭載のデバイスをもつ魔導師。おそらく“教団”の回し者に違いない。デバイスの話し方が偉そうに聞こえるが、そんなことはたいした問題ではない。

今まで気配を隠しきってたのはさすがと言えよう。だが、これで終わりだ。

「……。」

しばらくしてマイティは声の主を見つけた。
しかし、その正体は彼の予想を大きく裏切った。いや、越えていたと言うべきか…。

「……見つかったのは猫一匹と怪しげなデバイスだけか…。」

期待ハズレもいいところだ。

これを依頼人に報告しろと？

そのデバイスは紅く、手のひらくらいの大きさで、小さな目のようなものが二つついている。

『お前は……クラフトか？』

？俺を主人と勘違いしているのだろうか。

「クラフト？。それはお前の主人の名前か？」

主人の名を呼び捨てにするデバイスとは、なかなか興味深い。聞いたこともない。

『主人？いや、昔戦った敵の名前だ。』

「それなら、お前の主人は？」

『俺に主人なんていない。』

「どういうことだ？」

こんな感じにマイティとモデルＺは質疑応答を繰り返した。

「つまり、お前はその、モデルＶというデバイス…ライブメタルが作り出した歪んだ空間に吸い込まれて、気がついたらここにいた、ということか？」

『……ああ。』

マイティはため息をつく。
なんて面倒なものを見つけてしまったんだ…。

「モデルＺ、お前みたいなやつのことをこの世界では次元漂流者と呼ばれる。いや、お前の場合は次元漂流物かな。つまり、簡単に言えば時空の迷子だ。」

『その次元漂流者はこの世界ではどんな扱いを受ける？』

「時空管理局での保護。……ただ、お前の場合はそうもいかないだろう。」

『どういうことだ？』

「保護を受ける対象はあくまで“人”だ。“物”の場合、おそらく技術部門の奴等に弄ばれると思う。お前みたいな異世界のデバイ

スはこちらとしては格好の研究資料だからな。それより…。」

マイティが言葉を一旦、区切る。

「これからお前はどうする？」

『……。』

モデルＺは考える。

ここは俺の全く知らない世界、魔法の世界だ。一人でさまよったところで、時空管理局に見つかるのは時間の問題だろう。

それに……。

モデルＺは（すっかり空気になっていた）アイリスを見る。

こいつを助けたい。このままでは飢え死にしてしまう。

モデルＺは意を決した。

『マイティ、俺とこの猫を時空管理局に引き渡してくれないか。』

「……猫はともかく、お前の場合、無事という保証は無いぞ。それでもいいのか？」

『ああ、仕方ない。俺はこの世界について何も知らない。情報を手に入れるためにも、時空管理局に入り込むしかない。』

「そうか、わかった。ただ、その猫は時空管理局よりも聖王教会の方がいいだろう。」

『聖王教会？』

「巨大な宗教団体だ。時空管理局とも縁が深い。それに時空管理局と違って、いくらか命に対する道徳を持ち合わせている。」

『そうか…。』

そして二人は聖王教会へ向かった。

「司祭、彼女が管理局と接触しました。このルートは……聖王教会です！。」

「そうか。予定通りだな。」

まさか、ここまで予定通りだとは。

これも神の導きか…。

「ここからは計画通り、しばらく活動を控え、我らが主の欠片を探すことに専念しよう。」

「わかりました。すぐに兄弟達を向かわせます。」

「よろしい。全ては教団のため！！」

全身、白い法衣を纏った男が声を張り上げる。男は白い三角形の面

を着けている。目があると思われるところには黒い穴が空いていた。

「全ては我らが主のため！！！！！！！」

そう叫ぶ男の視線の先には、禍々しい光を放つ巨大なライブメタル…モデルVが浮かんでいた。

第3話「白い影」（後書き）

アカルイミライヲー

次回もよろしく。

それと作品中、意味不明なところや質問がありましたら、感想のところで述べて貰えると助かります。

では～

第４話「夕焼け」（前書き）

今回はみんな大好きヘンタイ医師登場です。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

始まります。

第４話「夕焼け」

「ところでドクター、我らが主…モデルＶの解析は進んでいるかね？」

三角の面を着けた男が尋ねる。

「……。」

「ドクター？」

「……実に興味深い。」

ドクターと呼ばれた男はまるで好奇心に駈られた子供のようにモニターを見て、そう呟いた。
完全に自分の世界に入り浸っている。

「おい、ドクター！……やれやれ、またあの調子か。」

一旦没頭すると、気が済むまで研究に打ち込み続ける。風呂にも入らない有り様で、良く言えば仕事熱心、悪く言えば自己中心的。

彼の仕事はモデルＶの解析だ。単体でも驚異的な力を有するモデルＶには膨大なデータが記録されており、そのほとんどが異世界の技術についてである。力を持つ、手に入れることをよしとする“教団”にとっては活動の原動力でもあり、……困ったことにそのデータを解析出来るのは彼、ドクター・ジェイル・スカリエッティ、ただ一人だ。

いや、本来なら喜ぶべきと言った方が正しいのだろう。彼が“教団”に入団してくれたおかげで、モデルVの更なる可能性が広がった。また、解析は彼以上できる者は管理世界にはいない。つまりモデルVの真の力を引き出せる組織は“教団”の他にはいないことになる。

だが、この男にはチームワークのようなものが全くと言っていいほど無い。それは彼が入団する前から知っていたことだが、まさかここまでひどいとは思いもしなかった。せめて解析し終わったデータはすぐにこちらへ渡すぐらいのことはして欲しい。

「ウーノ、君からも彼に言ってやってくれ。研究に熱心なのはいいが報告は迅速に、と。」

「ドクターにそう伝えておきます。」

三角面の司祭は薄紫の長髪の女性・ウーノにそう言うと、その場を立ち去った。

「ドクター、そろそろお休みになられては？ここ最近、ずっと働きずめです。」

「まだまだ大丈夫さ。それよりウーノ、聞いてくれ。面白いことがわかったよ。」

また、始まったと思いつつウーノは耳を傾けた。

「これをご覧。」

スカリエッティが指し示すモニターには一人の男が映っていた。

燃えるような赤の装甲に、黄金色の長髪。ヘルメット越しに見える鋭い目。そして手に持つ翡翠色の光る剣。

「この男は？」

「彼の名は“ゼロ”。モデルVを調べてわかったのだが、モデルVは何度か彼に敗れている。」

「欠片でも強い力を持つ、あのモデルVが何度もですか？」

「ああ。これがその最初の戦い。彼がこの姿でモデルV、厳密にはモデルVになりかけている男、と戦ったのはこれが最初で最後だね。」

「ドクター、先程“何度か”とおっしゃいましたよね。」

「ああ、言ったよ。面白いのはここからでね…、この後彼自身ライブメタルになってモデルVに立ち向かっているのだよ。」

その名も、ライブメタル・モデルZ。

「単純なスペックならモデルVの方がはるかに上なんだがね、どういうわけかほとんどの戦いで勝利を収めている。」

「不思議ですね。これをあの司祭が聞いたら……」

「怒るじゃ済まないだろうな。信仰がどうとか、モデルVこそ絶対の力だ、とでも言い出しかねないね。」

「そうですね。この事は司祭には話さない方がよろしいと？」

「ああ。それともう一つ。」

スカリエッティの目が大きく見開く。

「彼……モデルＺもこの世界に来ている。」

聖王教会へ向かう途中、マイティは依頼人に連絡をとっていた。

「以上が調査の結果だ。壁に付着していた血の量からして、おそらく調査員の一人は死んでいると思われる。」

『そうですか、ご苦労様です。他に何か見つけましたか？』

「そうだな…。あとは、猫一匹と、

『待ってください！！！！！』

依頼人が突然、声をだす。

『今、猫と言いましたか？』

「ああ、それがどうした。」

『もしかしてその猫の首もとにネームプレートか何かつけていませんか？』

「ネームプレート？」

マイティは後ろを振り替えり、猫を見る。確かに首もとにネームプレートらしきものがあった。

「……アイリス、と彫られている。」

『本当ですか！』

「ああ。それが一体どうした。」

猫ぐらいでここまで取り乱すとは。
それともこいつに何か重要なものが隠されているのか。

『その猫、アイリスは……いえ、詳しくは聖王教会で話しましょう。』

なるほど、この猫はただの捨て子ではなく聖王教会と繋がっているらしい。

「しかし、特務零課の隊員と聖王教会のお偉いさんが直接会うのは、世間体上まずいのでは？。」

聖王教会が金で動く汚れ部隊に依頼したのが発覚したら、かなりの損害をこうむる。今まで築いてきた信頼や地位が容易く崩れるだろう。
いや、大きな組織だから組織そのものがなくなることはないだろう

が、かなりの打撃を受けることは間違いない。

『あなたを“各地を巡礼中の信者”ということにしておくので大丈夫です。』

何故そこまでして俺と話したいのか、正直わからなかった。

今までの依頼人ならば、猫を届けたらそれで任務終了になるはずだ。

なのに何故…

『では聖王教会でお待ちしております。』

通信が切れた。

今回の任務は一人も殺すこともなく終わりそうだ。こんなことは何ヵ月振りだろうか…。

『考え事か？』

それまで黙っていたモデルZが尋ねる。

「まあな。人を殺さなかった任務は久し振りだな、とな。」

『戸惑っているのか？』

「何？」

『まだ会って間もないが、見たところお前は今まで依頼人の道具として戦ってきたのだろう。だから、今回の依頼人の行動に驚いている。違うか？』

会って一日も経っていないのにそこまで知られるとは。

「ただの漬物石だと思っていたが、そこまでわかるとは。ただ者ではないな。」

『漬物石ではない。俺はライブメタルだ。』

「そうだったな、ライブメタル・モデルＺ。」

「ニャア（アイリスの鳴き声）」

『ところで、マイティ。何故俺たちを助けようとした？』

モデルＺが最も疑問に思っていたことを尋ねる。それに対し、マイティは当然のようにこう言った。

「それは、俺も一応時空管理局の一員だからさ。」

俺はこの事を誇りに思っている。いや、思っていた。

「それと、後悔したくなかったから、かな。」

最後に、誰にも聞こえないくらいの音量でマイティはそう呟き、空を見上げた。

もう太陽が沈みかけているため、空は朱に染まっている。

まるでこれから起きる流血の惨事を告げるかのように。

第４話「夕焼け」（後書き）

オリ設定

・この世界は魔導師ならばライブメタルと会話可能。

次回もよろしく

第5話「悪夢」（前書き）

執筆が長くかかってしまいすいませんでした。今後もあると思いますが…

ところで、もしよろしければ感想や評価をしてくれると助かります。今後の文章力アップのためにも、ストーリー性アップのためにもどうかお願いします。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｚの軌跡～

始まります。

第5話「悪夢」

その日は空が曇っていて、星を観察することができなかった。それなのに幼い俺は望遠鏡を使って、懸命に星を見ようとした。

確か、自分だけの星を見つけようとしていたのだと思う。その頃、アマチュア達が次々と新しい星を発見していて、天体観察が世間でちょっとしたブームになっていた。

まあ、幼い俺はきっとブームに関係なく星を見ていたに違いない。

この日、俺の日常が壊れる時までは。

食後にもう一度星を観察しようとした俺は、両親に研究所へ連れていかれた。

始めての研究所に俺は興奮した。所狭しと並ぶ機器、白衣の研究員達。初めて見るものばかりだった。

俺と両親はやがてある扉にたどり着く。扉の上には赤いランプが光っていた。

父がその扉を開ける。

何かの薬品のにおいが鼻をつく。

その扉の先にあった光景は……

ミッドチルダ北部ベルカ自治領

もう日は完全に沈み、辺りはすっかり暗くなっていた。

『この世界には月が二つあるのか。』

モデルZは少し驚いたように言う。彼の世界には月は一つしか存在しないとのことだ。

「着いたぞ。」

マイティ達が聖王教会に着くと、一人の修道女が出迎える。紅梅色の髪を短く切り揃えた、地味目の修道女はにこやかに自己紹介をした。

「初めまして。私はここの修道女、シャッハ・ヌエラです。あなた方が、騎士カリムがおっしゃっていた、巡礼中の信徒ですね。」

“巡礼中の信徒”というところを強調して言っていることから、こちらがそうではないことをこのシスターは知っているようだ。

「まあ、そういうことになるかな。俺はマイティだ。よろしく。」

「ええ、こちらこそ。」

マイティ達は荘厳な雰囲気の教会へ入っていった。

同時刻

とある高層ビルの中の宝石店。
ここには女性を魅了する、色取り取りの宝石がショーケースに並んでいる。
そして展望台でもあるため、ミッドチルダのきれいな夜景を見渡すことも可能だ。その光景はまるで煌めく星達のようである。
いつもなら高貴な身分の方やタキシードを着た紳士達の憩いの場であったが、今日は違った。

「主の欠片…いや、その宝石を譲ってはくれないだろうか。」

「お客様、これは売り物ですので譲るわけにはいきません。それ相応の額をお払いになられましたら…」

「主の欠片を金銭でもらいうけることは、主を侮辱することになる。わかっていただけたか？」

「いや、わかりません。」

今、どのような状況なのかというと…

白いスーツを着こなした男三人がある宝石を譲ってくれ、と店員に詰め寄っているのだ。

その宝石、というよりも原石は、翡翠の小さなクリスタルが埋め込まれた紫色の石で、大きさは握りこぶし一つ分といったところか。輝きを放つように磨かれた宝石とはまた違う、自然の石の美しさという魅力が原石にはある。

そのため原石を買う金持ちはそう珍しくはない。

が

無料で譲れと言う奴はまずいない。

女性ならともかく（？）男性三人というのは異様な光景だと言えるだろう。

男達と店員のいたちごっこはもう３０分に及ぶ。さすがの店員も頭にきたのか、警備員を呼ぶぞ、と怒鳴った。

「あれは本当に主の欠片なのですか？。色も“教団”のものとは随分と異なっていますが…」

「心配はいらない。あれは確かに主の欠片…モデルＶだ。私のモデルＶがそう言っている。」

「ですが警備員に来られると、結構面倒ですよ。」

“教団”の三人が相談していると、黒服の魔導師が四、五人、こちらに歩いてきた。

「おいでなすったな。」

“教団”のリーダー格の男はポケットの中のある物に手をかける。
なるべく穏便に、と言われたがやむ無しか…。使わせて貰うぞ、モデルVの……ロックマンの力を！！
リーダーがオレンジ色のクリスタルを取り出す。
「貴様、そんなものを取り出して一体何のつもりだ。」
「お客様、物々交換はちょっと……」
警備員と店員がそれぞれの反応をする中、リーダーはパスワードを唱えようとした。
「ロック・……！？、その石から離れろ！！！！！！！！！！！！！！」
「なっ！？」
「え、一体…」
直後、閃光が室内を包み込んだ。
マイティ達はシャッハについていき、聖堂にたどり着いた。そしてそこにいるのは…

「よく来てくださいました。直接会うのは今回が初めてですよね。」

シャッハとは形状の異なるシスター服を着た年若い聖職者。
黄金の髪を腰の辺りまで垂らしており、高貴な印象をこちらに与えていた。

「私は聖王教会・教会騎士カリム・グラシアです。今回の依頼を引き受けてくれてありがとうございます。そして、任務ご苦労様、アイリス。」
アイリス？

『どういう事だ？』

モデルZが尋ねる。

「……なるほど、つまりあの猫は聖王教会の使い魔、ということか。」

「その通りよ。」

マイティ達が振り向くとそこにいたのは小さな子猫ではなく、凛とした面差しの少女がいた。

見た目は十代半ばで、ブロンド色の短い髪、カジュアルな服装、そして頭には猫のような耳がついている。
ちなみに本来、人間の耳があるはずのところは髪で隠れて見えない。
そこに耳があるのか、ないのかは謎だ。

「騎士カリム、これがこの一ヶ月の記録です。」

アイリスは猫の時につけていたネームプレートをカリムに渡す。
カリムはそれを受けとるとデータを閲覧した。
「特に変わった動きは見られませんね。あなたの主のこと以外は…」
ネームプレートを机の中にしまう。
「おい、依頼人。」
「カリム、でいいですよ。」
「カリム、その猫……アイリスはもしかしてお前が言っていた二人の調査員の…」
「ええ、彼女はその一人です。殺されたと思われる、もう一人の調査員は彼女の主です。」
「ちょっと待て、おかしくはないか?。なぜ主が死んだのに、使い魔のこいつは生きている?」
使い魔とは魔導師が自らのパートナーとして作成する魔法生命体で、主人の魔力を受けて生命を維持している。
つまり主人が死んでしまえば、使い魔も死んでしまう。
はずなのだが、アイリスは主人が殺されているのにも関わらず、平然としている。

これは一体どういう事なのか？

この疑問にアイリスが直接答える。

「私は突然変異によって魔力を自分で生成することができるようになったから、主が死んでも自由に活動できるのよ。」

馬鹿な…。そんな話、今まで聞いたこともない。

しかし現に目の前にいるのだから、おそらく本当なのだろう。

「ところで、なぜ俺達を聖王教会に呼んだ？」

マイティはカリムに尋ねる。

自分は特務零課の隊員。時空管理局の一員といっても、やっていることは正直言えたものではない。そんな奴と直接会いたがる奴など、今までいなかった。

カリムの表情が少し寂しくなる。

「この前はすみませんでした。」

「何の事だ？」

「その、あなたを道具扱いしたことについてです。本来なら、あの時あなたが言っていたように、私達で行うべき調査でした。それなのに、私は…」

「別に気にしてはいない。むしろ、お前の判断は正しかった。」

「え！？」

「今回の任務は生きて帰れる保証はどこにもない。貴重な仲間をこれで無くすよりは、金で動く人間を送り込めばいい。たとえ最悪の事態が起きたとしても、死ぬのはそいつだけだ。」

一呼吸置く。

「リスクを最小限に抑える。指揮官ならば当然すべき事だ。それに、……特務零課はそのために創られた。」

燃え盛る炎の中は恐怖と絶望が支配していた。生き残った者の視線の先には……その恐怖を食らう悪夢が立っていた。

紫と白という独特の配色のため透けているように見えるボディ。また、胸部には半球型の翡翠のクリスタルが二つ埋め込まれている。

悪夢は辺りを見回した。

建物内に取り残されているのは約五十人。

が、その中に彼が探している宿敵はいなかった。

「…………ゼロ、ドコニイル？…………」

悪夢は考えた。

どうすれば会えるか？。

そして最も簡単な方法を思い付く。

探して見つからないなら、こちらが相手にとって無視できないような状況を作ればいい。

そのためには…

まず、ここにいる奴等を皆殺しにすればいい。簡単なことだ。

悪夢の右拳に光が集まっていく。

恐怖のあまり、客達は動けなかった。

もう彼らに助かる望みはない。

そして…………

「消エロ、…………………真・滅閃光！！！！！！！！！！！！！！！」

破壊の光弾が彼らを無慈悲に襲い掛かる。

第5話「悪夢」（後書き）

いつ投稿できるかわかりませんが、次回もよろしくお願いします。

第5話補充（前書き）

タイトル通りです。

第5話補充

「ロック・……！？、その石から離れろ！！！！！！！！！！！！！」

白いスーツを着た男がそう叫んだ瞬間、その原石のクリスタル部が強烈な光を放った。

原石のそばにいた、白スーツ三人組と店員、警備員は何か見えない力で吹っ飛ばされる。

しばらくして光が目を開けられるくらいには弱まると、そこには一人の青年が立っていた。

青年は不思議な格好をしていた。

重厚感溢れるボディ、ショルダーガード、銀の髪が垂れているヘルメット。

紫と白の配色のせいでどこか幻想的に感じる。

「石が人に、変わった？」

胸部には半球のクリスタルが二つ埋め込まれており、翡翠色の輝きを放っている。

それまで俯いていた青年が顔を上げた。

その表情は……

「笑っている？」

それも微笑みといった類ではなく、狂気、歓喜の笑いだった。

そして……

「……フ、フフフ、フハーハッハハハハハハハハハハハハ！！！！！！！！！！！！！！！」

高笑いしながら、そばにいた店員を斬りつける。

彼の右手にはいつの間にかにビームサーベルが握られており、白と黒のグラデーションの刃が店員の身体を容易く切断した。

店員は反撃することなくその場に倒れる。

白スーツの一人は手のひらのモデルVを固く握り締めた。

「何なのだ?、この私のモデルVをも超えるプレッシャーは……。」

四、五人の警備員が片手杖状のデバイスを取り出した。

「「「「バインド！」」」」

青年の四肢が光の輪で拘束された……かに見えた。

「ソンナオモチャデ、コノ俺ヲ止メラレルトデモ思ッタカ！！！」

そう言い放つと青年の身体が霧のように消え失せ、拘束していた四つの光の輪が宙を浮いていた。

「奴は一体どこに？……ゲホッ！？」

一人の警備員の口から血塊が吐き出される。

警備員は消えゆく意識の中、後ろを振り向く。

そこには自分の返り血を浴びて、狂気の笑みを浮かべている奴がいた……。

仲間を殺され、激情に駆られた残りの警備員達が各々の魔法で青年を攻めていく。

杖のクリスタル部から光線が青年めがけ、一直線に飛んでいく。

何本も、何十本も。

もはや数えきれないくらいの光線が青年を攻めていく中、青年は笑みを絶やさなかった。

攻撃が当たった

と思うとすでにそこに青年の姿はない。

光線、一発一発を全て避け、かつ、徐々に警備員達との距離を狭めていく。

まるで戦闘を楽しんでいるようだ。

に対し警備員達は一つとして自分達の攻撃が通用しないことに驚き慌てていた。
管理局員でない彼らでも一応はテロリスト相手に戦えるよう訓練されたエリートである。だからこそ管理局の、デスクワークばかりしている高官や政界に強い影響力をもつ金持ちが集まるこの建物に配備されているのだ。

そして、そのエリート達が圧倒され、青年との距離がわずか数メートルになっていた。

「……飽キタナ。」

青年はそう言うと一気に近づき、瞬く間に残った警備員達を全て斬り殺す。

死体を踏みつけ、青年は客達の方を睨み付ける。

「……モウ終ワリカ？」

青年は一歩、また一歩と客達へ歩み寄る。

客達は一斉に非常階段の方へ走り出す。エレベーターを待っている時間はなかった。

我こそ先に、と必死の形相で非常階段を目指す。

人数は約百人。これだけいれば自分だけでも生き残れるかもしれない。

誰もがそう期待しており、そしてその期待はあっさりと裏切られる。
非常階段の扉にいち早く着いた客が扉を急いで開く。
このまま階段を駆け下りる、と思っていたが……

「ドコへ行ク？」

そこにはすでに奴がいた。ひき返そうとしても、事情を知らない後ろの連中が背中を押してくる。

「コノ俺カラ逃ゲラレルトデモ思ッタノカ？。残念ダッタナ。俺ヲ見タ以上……皆殺シダ！！！」

青年は左腕を突き出す。

掌はあっという間に砲口へと姿を変え、光が集束していく。

「……消エロ。」

左手から放たれたエネルギー弾が辺り一帯をなぎ払う。

皆が階段へ意識を集中していたこともあり、砲撃の餌食になった者は少なくない。

「ソレデモ五十人チョットハ生キ残ッテイルカ。」

確かにそのくらいはいた。
だが今の砲撃によって、足をちぎられた人、手をもがれた人、なんとか無傷で済んだ人等様々だ。皆が恐怖に怯えている。

その中で一人だけ闘志を燃やしている男がいた。あの白スーツである。側近の二人がいないところを見ると、彼らはもう既に死んだのだろう。

「ロック・オン！！！！！」

白スーツが光に包まれる。
黒と白の装甲が身体に装着していき、頭と肩と膝にオレンジ色の尖った突起が生えていった。

「ロックマン・モデルV……」

白スーツは青年に向かって光弾を放つ。先ほどの警備員達のとは威力もスピードも違う。

が、それでも青年には当たらない。

「射撃が駄目なら……接近戦だ！！！！！」

白スーツは右手にエネルギーを溜めながら、青年めがけ猛然と突っ込む。

「うおおおおおおお！！！！！！！！！！！」

白スーツは青年の胸部に向け、エネルギーを解放し、攻撃を放つ。

「ラグナロク・クラッシュ！！！！！！！！！！」

白スーツの右手はオレンジ色のスティンガーとなって青年を貫こうとする。

「馬鹿メッ！！！！」

が、またしても青年は白スーツの前から霧のように消え、白スーツの渾身の一撃は空振りに終わった。

「死ネ。」

白スーツの背後に、今にもサーベルを振り下ろそうとしている青年が立っていた。

青年が力を籠め、サーベルを振り下ろす！！！

「それを待っていた。」

白スーツはサーベルを紙一重で避け、左手を青年の腹部に打ち込む。

「！？」

こいつは消えたあと必ず死角にまわりこんでくる。それさえ判れば、かわすのは容易い。

左手のスティンガーがメリメリと音をたてて青年の腹に穴を開けている。

「エネルギー解放……消し飛べ！！！！！」

スティンガーが光り出す。

その直後、青年は吹っ飛ばされて壁に叩きつけられる。

腹部には大きな穴が空いていた。人間なら間違いなく即死だろう。

だが彼は人間ではない。

「頑丈な奴だな。」

青年は立ち上がった。それでも先ほどの攻撃は効いたらしく、ふらついている。

「貴様……」

青年の表情が変わった。あの狂気の笑みは消え、目に怒りが籠っている。

「ヨクモ、コノ俺ヲ……」

胸部のクリスタルが強い光を放つ。それに呼応するかのようにサーベルの長さが次第に長くなる。

「こいつ、その身体のどこにこれほどのエネルギーが…」

白スーツは動けなかった。先程の攻撃でエネルギーを使い果たしたからではない。

青年のプレッシャーに完全に気圧されていた。

青年がサーベルを構える。

「食ラエ……幻夢・零！！！！！！！！！！！」

サーベルから巨大な衝撃波が放たれた。

「ゼロ、ドコニイル？……」

彼が探している目的の人物はそこにはいなかった。何度も自分を倒し、自分の元となった紅き英雄・ゼロ。

彼がライブメタルとしてこの世界に来ていることを知らない彼は、どうすれば会えるか考える。

そんな彼を見ている人々の顔から生気は無かった。

頼みの綱と思っていた白スーツも先程の攻撃で一刀両断され、無惨に屍を晒している。

また、その時の攻撃の余波でエレベーターは炎上し、非常階段も瓦礫に埋まってしまった。

もう逃げ場はなかった。

しばらくして青年はある考えに行き着く。騒ぎを起こすことで誘き寄せる、という考えだ。

今までにも一度だけそれをやった記憶はある。ただ、その時はゼロに会えず、彼の親友に破壊されたが……

今ここで出来るのは、せいぜい残った奴を消すくらいだ。もともとそのつもりなのだが…

青年は右手に力を溜める。

「消エロ……」

右手で思い切り床を殴り付けた。

「真・滅閃光！！！！！！」

青年の周囲から、たくさんのエネルギー弾が全方向に飛んでいった。

後日、ニュースでこのことが報道される。現場の映像では、床や天井は崩れ、誰一人生きているものはいなかった。

報道局は詳しい情報がないため、テロ事件として締め括った。あの場所は高官がよく集まるからでもある。
管理局もテロ事件として捜査しているが、これといった進展はない。

以上がニュースの内容だ。

これを見て、ライブメタルの力だと気づいたのは“教団”とモデルZ以外誰もいなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3612z/

魔法少女リリカルなのはStrikerS ～Ｚの軌跡～

2011年12月29日16時45分発行